

[原著論文]

五十音順排列に関する一考察

——ある中学入試を題材に——

松山 巖

要 約

辞書の見出し語等に用いられている五十音順について、辞書の凡例には書かれていない暗黙の規則があり、それが五十音や国語の歴史からみて、理にかなっていることを明らかにした。また一方で、辞書の利用者は必ずしも暗黙の規則に十分通じているとは限らず、辞書を使う際には特に問題とならないが、辞書の排列そのものを試験で問うような場合は配慮が必要であることを論じた。

キーワード：五十音順，濁音，半濁音，排列，正書法，辞書，試験問題

I はじめに

I-1 ある入試問題より

次に掲げる問題は、聖光学院中学校（神奈川県）という私立中の2002年度の入学試験で出題された国語の第2問である（原文縦書き）。

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

ある国語辞典では、次のようなきまりにしたがって見出し語をならべています。

- ① 見出し語をかな書きにして、あいうえお順（五十音順）にならべる。
- ② 一字めが同じ発音の場合は二字めで、二字めも同じ場合は三字めで決めるというふう
に、五十音順にならべる。
- ③ 濁音の「ば」「ぶ」「ぼ」などは清音の「は」「ふ」「ほ」のあとに、半濁音の「ぱ」「ぷ」「ぽ」などは濁音のあとにならべる。
- ④ 拗音の「ゃ」「ゅ」「ょ」や促音の「っ」などのような小さい文字で書くかなは、ふつ
うの「や」「ゆ」「よ」や「つ」などのあとにならべる。
- ⑤ のばす音（長音）を含む言葉は、たとえば「コーヒー」を「コオヒイ」と考えるよう

に、その上の母音ぼいんを繰り返した形におきかえてならべる。

- ⑥ 見出し語が同じ発音の場合は、ひらがなを先に、カタカナをあとにならべる。
- ⑦ 見出し語の読みが全く同じ場合は、あてはまる漢字の一字めの画数が少ない方から順にならべる。漢字の一字めの画数が同じ場合は二字めで、二字めも同じ場合は三字めで決めるというふうに、画数の少ない順に並べる。

問 次の1～5の語群の言葉を、右のきまりにしたがって、それぞれならべかえて記号で答えなさい。

1 ア 不安	イ ファンファーレ	ウ ファミコン
2 ア <small>ひょう</small> 表	イ 美容	ウ 費用
3 ア しょっぱい	イ 食器	ウ しょっちゅう
4 ア ヒント	イ びんづめ	ウ ピンセット
5 ア 成果	イ 正価	ウ <small>せい</small> 生花

この問題は、日能研という中学受験塾が、2002年9月に電車の車内広告に掲載した。解答と解説は同社のウェブサイトに掲載され、それによると次のようである。

解 答

- 1 ア (不安) → ウ (ファミコン) → イ (ファンファーレ)
- 2 ウ (費用) → ア (表) → イ (美容)
- 3 イ (食器) → ウ (しょっちゅう) → ア (しょっぱい)
- 4 ア (ヒント) → イ (びんづめ) → ウ (ピンセット)
- 5 ウ (生花) → イ (正価) → ア (成果)

なお、同サイトでは出題の意図などに関する解説は掲載されているが、個別の小問に対する解説はない。

ところが、受験問題集を多数出版している「声の教育社」の入試問題集では、一部の設問についてこれと異なる答えを正解としている。比較しやすいように、日能研の解答と同じフォーマットに改めて紹介する。また解説は解答とは別のところにまとめて掲載されているが、ここでは各小問のところに織り交ぜて記す。

- 1 ウ (ファミコン) → ア (不安) → イ (ファンファーレ)
 きまりの②にもとづけば、三字めが「ミ」であるウが最初にくる。
- 2 ウ (費用) → ア (表) → イ (美容)
 きまりの③、④に注目する。いちばん初めにくるのは清音だけのウ「費用 (ヒヨウ)」、次

に、一字めが清音で、二字めが拗音の「表（ヒョウ）」、最後に一字めが濁音の「美容（ビョウ）」になる。

3 イ（食器） → ウ（しょっちゅう） → ア（しょっぱい）

「しょっ」[ママ。正しくは「しょっ」]までは同一なので、四字めで決める。

4 ウ（ピンセット） → イ（びんづめ） → ア（ヒント）

③のきまりにまどわされないように注意する。三字めがすべてちがうので、こちらの五十音順がここでは優先する。

5 ウ（生花） → イ（正価） → ア（成果）

三つとも読みが同じなので、⑦のきまりにしたがう。アは一字めの「成」が六画、イは一字めの「正」が五画、「価」が八画、ウは一字めの「生」が五画、「花」が七画。

このように、5問ある設問のうち1と4で両者が食い違っていることがわかる。

この問題集では、各小問についてなるべく解説を試みようとしているが、特に小問1と4について、先述の日能研のような解答を出した児童がこれを読んで納得するかどうか疑問が残る（これについては後述）。

なお、声の教育社と並んで各学校の入試問題集を発行している東京学参の解答と解説は次の通りである（ここでも解説は各小問の解答の次に織り込んだ）。

1 ウ→ア→イ

②と④にしたがって考える。

2 ウ→ア→イ

③と④にしたがって考える。

3 イ→ウ→ア

イは「しょっき」と読む。②にしたがって考える。

4 ウ→イ→ア

②にしたがって考える。

5 ウ→イ→ア

アもイも「せいか」と読む。⑦にしたがって考える。アの「成」は6画。イの「正」、ウの「生」は、ともに5画。したがってアは1番最後。イの「価」は8画、ウの「花」は7画。したがって、ウが一番最初。

解答そのものは声の教育社と同一である。ただ、解説は5のみ詳しく、肝心の1と4についてはそっけない。したがって、以下では主として声の教育社の解説を考察対象とする。

I-2 相異なる解釈

I-2-1 考え方その1. 日能研の場合

このように2通りの解答が生まれた原因を、問題に即して考える。以下では、小問1と4のみを考察対象とし、残りの3問は考えない。

まず1番を見てみる。両社が発表した回答は、

日能研…… ファン → ファミコン → ファンファーレ

声の教育社…… ファミコン → ファン → ファンファーレ

である。

また、日能研のウェブサイトに掲載された解説には、

「辞書の言葉の配列について、条件が①から⑦まで7つ挙げられています。またこの条件は辞書として重要な条件から順番に挙げられています（たとえば「五十音順に並べる」という条件よりも前に、「長音を先に並べる」という条件が来ることはありません）。ですから、条件に言わば軽重があります。」

というくだりがある。

「辞書として重要な条件」と述べているが、よりの確な表現をすれば、「条件を適用する優先順位の順」と考えられる。すなわち、まず常に適用される大前提として、条件①の五十音順がある。次に、それだけでは排列¹⁾の順序に疑義が生じる場合があるので、その際には条件②を適用して清音→濁音→半濁音の順とする、等々。

このことから、次のような段階を踏んで解答が導き出される。

日能研の考え方：

1. きまり②により、1文字ずつ比較する。1文字めは全て「フ」で同一。2文字めは「ア」と「ァ」で異なっている。
2. きまり③により、小文字は大文字の後なので、ファンが最初。
3. ファミコンとファンファーレとは、3文字めが異なる。
4. 「ミ」と「ン」を比較して出来上がり。

I-2-2 考え方その2. 声の教育社等の場合

一方、声の教育社の考え方だが、こちらは幸い、解説が詳しく書かれており、その中に「きまりの2. にもとづけば、三文字めが「ミ」であるウが最初にくる。」と説明されている。したがって、ここでは上記の日能研が違う文字として扱った2文字め（ア/ァ）が同一視され、3文字目の比較に移っていることが分かる。まとめると、次のようになる。

声の教育社の考え方：

1. きまり②により、1文字ずつ比較する。1文字めは全て「フ」で同一。2文字めは「ア」と「ァ」だが、これは同じとみなす²⁾。
2. 3文字めの比較に移る。ファミコンの「ミ」が残り2つの「ン」より先に来る。
3. 残りのファンとファンファーレを比較する。きまり②により、3文字めまで全く同一。
4. 4文字以降があるファンファーレが後になる。

東京学参は一言「②と④にしたがって考える」とあるだけだが、同様の論理といえる。

1-2-3 両者の比較

きまり②に「一字めが同じ発音の場合は二字めで」（下線引用者）という規定がある。「ァ」と「ア」という2文字を、それだけ取り出して単独で発音すれば、たとえ「ァ」と書いてあっても「ア」と同じ読み方をするしかない。しかし、本当に「同じ発音」といっていいのだろうか。そもそも「ファ」という表記は/fa/という音節を表現するための表記法であって、いわば2文字セットで考えるべきであり、/f/＝「フ」、/a/＝「ァ」と対応するものではない。すなわち、「ァ」だけの単独の発音を考えて排列すること自体無意味ともいえる。

まして促音の場合、「てつき（鉄器）」の「っ」の発音は、後続の子音/k/の閉鎖が通常より長く持続することによって生じる無音状態であり（IPAでは [tek:i] と表記しうる）、これと「てつき（手付き）」の「つ」が同じ発音であると主張するのはかなり無理がある。

そう考えると、両者を「発音が異なる」とみなした（と思われる）日能研の解答のほうが一応論理的といえよう。

一方、声の教育社や東京学参の考え方にも一理ある。

これらの解答作成者が、問題文の条件に明示的には書かれていないにも関わらず、「ア／ァ」を同一視するという手順をとったのはなぜかといえば、実際の国語辞典が（おそらく全て）そのような排列方針をとっているからである。

つまり、もし日能研方式で見出し語を排列したら、たとえば先頭から2文字めまでを考えた場合「ファ……」で始まる語が全部終わってから「ファ……」で始まる語に移ることになり、「しや……」で始まる単語が全部終わってから「しや……」で始まる単語が並ぶことになるが、実際の国語辞典でそんな並べ方をしているものはないではないか、「ファ」と「ファ」、「しや」と「しや」は混在しているぞ、ということだ。

拗音・促音などの小さい文字だけではない。濁音・半濁音についても、たとえば「か」で始まる語と「が」で始まる語は混ぜて並べられている。「か、かあ、かい……かん、が、があ、がい……」のような排列方法の辞典は皆無である。書店や図書館に行って何冊か辞典を開いて見れば容易に分かる。そして、どの辞典を見ても、「大文字と小文字は同一視する」とか「濁点・半濁点の有無は無視する」などとは書かれていないのだ（この試験問題と同様）。

一般の辞典でたとえ凡例になくとも「ア＝ァ」の同一視を行っている以上、本文においてもそうするのが自然と考えたのであろう。あるいは、日頃から辞書を引き慣れている人ならわざ

わざどちらが自然かなどと意識さえしなかったのかもしれない。

ところで、それならばきまり③（清音→濁音→半濁音）やきまり④（ふつうの仮名文字→拗音・促音などの小さい仮名文字）はいったいどこで生きてくるのか。勝手に同一視してはルール違反ではないか、という疑問も生じてこよう。

実は、一般の国語辞典の排列にはここに挙げられていない、「見えないルール」が追加されているのである。

たとえば、ある国語辞典の凡例のところに、「見出し語の並べ方」が、この試験問題文に示されたとおりに載っていたとしよう。その場合、実際に排列作業を行うときには、日能研のような解釈ではなく、次の下線部分を補って作業されることになる。

① 見出し語をかな書きにして、あいうえお順（五十音順）にならべる。

①の2 濁音・半濁音はいったん清音に置き換え、また拗音・促音などの小さい文字は大きい文字に置き換えて、仮にならべる。

② 仮置き換えをした結果、一字めが同じ発音の場合は二字めで、二字めも同じ場合は三字めで決めるというふうに、五十音順にならべる。

②の2 以上の並べ方を行なったうえで、それだけでは順序が決まらない語があれば、仮置き換えの解除を行ない（それぞれ、もとの濁音・半濁音・拗音・促音などの形に戻す）、以下のルール③④を順次適用する。

③ 濁音の「ば」「ぶ」「ぼ」などは清音の「は」「ふ」「ほ」のあとに、半濁音の「ぱ」「ぷ」「ぽ」などは濁音のあとにならべる。

④ 拗音の「ゃ」「ゅ」「ょ」や促音の「っ」などのような小さい文字で書くかなは、ふつうの「や」「ゆ」「よ」や「つ」などのあとにならべる。

⑤ のばす音（長音）を含む言葉は、たとえば「コーヒー」を「コオヒイ」と考えるように、その上の母音を繰り返した形におきかえてならべる³⁾。

⑥ 見出し語が同じ発音の場合は、ひらがなを先に、カタカナをあとにならべる。

⑦ 見出し語の読みが全く同じ場合は、あてはまる漢字の一字めの画数が少ない方から順にならべる。漢字の一字めの画数が同じ場合は二字めで、二字めも同じ場合は三字めで決めるというふうに、画数の少ない順に並べる。

実際の辞典の凡例などにこの「仮置き換えとその解除」が書かれている例に出会ったことはない⁴⁾が、伝統的に「五十音順に並べるといったら、自動的に①の2、②の2も含まれる」と考えられてきた。暗黙の了解といってもよいかもしれない。

1-2-4 日本語文字列照合順番

さて、この暗黙の了解を明示的に規定した例として、JIS（日本工業規格）X 4061「日本語

文字列照合順番」がある（「照合」とは、複数の文字列（を含むレコード）に対して照合規則を適用して、レコードの排列順序を定める手続きのことである）。

原文はたいへん細かいところまで規定してあるが、要点を説明しよう。

1. まず、仮名はいったん「基底文字」と呼ばれる文字に置き換える。例えば、「あ、あ、ァ、ア」の4文字はすべて「あ」という共通の基底文字になる。同様に「かがカカガ→か」「つつづつツツ→つ」などとなる。

この結果、「ふあん ファンファーレ ファミコン」はそれぞれ、「ふあん ふあんふあーれ ふあみこん」となる。

2. 次に、長音記号「ー」は直前の基底文字の母音に置き換える。たとえば「あかさたなはまやらわ→あ」といった具合である。

この段階では、上の例は「ふあん ふあんふああれ ふあみこん」となる。

3. この段階で1文字めから照合(前後関係を決めること)を行う。「ふあ」までは共通なので、3文字目で「みくん」⁵⁾、次に4文字めで「ゆくふ」⁶⁾。したがって「ふあみこんくふあんくふあんふああれ」となる。

4. ここで決まってしまったので、仮置き換えの解除まで行かずに答えが出たが、もしこの段階でまだ同順位のものがある場合は、仮置き換えを解除してさらに比較する。その際の基準は、清音<濁音<半濁音、長音記号<小文字<繰り返し記号<大文字、平仮名<片仮名、となっている。

I-3 小問4の場合

問題の4では、この暗黙の了解に従うかどうかの違いがはっきりと効いてくる。

日能研の考え方：

1. きまり②により、1文字ずつ比較する。1文字めは「ひ」「び」「び」で全て異なる。
2. きまり③により、ひ→び→び、であるから、2文字目の比較に進むまでもなく、ヒント→びんづめ→ピンセット、が答え。

声の教育社の考え方：

1. きまり②により、1文字ずつ比較する。1文字めは「ひ」「び」「び」であるが、「暗黙の了解」により、これらは全て同じ文字「ひ」とみなすので、この段階では順序は決まらない。2文字め以降についても同様に仮置き換えをすると、「ひんと ひんづめ ひんせつと」となる。
2. 2文字めに進む。全て「ん」で同じなので、まだ順序は決まらない。
3. 3文字めを比較する。せ→つ→と、であるから、ピンセット→びんづめ→ヒント、が答え。

こうなってくると、声の教育社の解説にある「③のきまりにまどわされないように注意する。三字めがすべてちがうので、こちらの五十音順がここでは優先する。」という説明は不十分である。きまり②を適用した際、1文字めはそれぞれ「ひ」「び」「び」である。どうみても「一字めが同じ発音の場合」とはいえず、三者三様に異なっている。したがって、きまり②の「一字めが同じ発音の場合」という規定は適用されず（というより②を適用してまず1文字めを比較した結果、発音が同じではないので、2文字めに進む必要が生ぜず）、1文字めに対してきまり③の適用に移るのは当然と考える子もいるだろう。その子に対して「③のきまりにまどわされないように注意する」と説明しても納得のいくものではあるまい。まして、1文字めで順序が決まってしまうと考えている子に対して「3文字めの五十音順がここでは優先」と説明しても、「ここではというが、ここだけ勝手にきまり②を無視してしまっているのか」と反問されたら説明に困る。

1-3-1 両者の見解の相違点

両者の見解の相違を簡単にまとめてみる。

日能研：この問題文のルールでは仮置き換えについて触れていない以上、仮置き換えは行わない。

声の教育社等：一般に五十音順といえ（いちいち凡例に書かれていなくても）仮置き換えも含まれるので、ここでも行うべきだ。

日能研：この問題はあくまでも「ある国語辞典」のルールであって、国語辞典一般のルールではないのだから、示されたルールをいかに的確に判断できるかを問うているものである。よって、問題文に仮置き換えが書かれていない以上、行わない排列をすべきだ。

声の教育社等：「ある国語辞典」のルールであっても、きまり①で「あいうえお順（五十音順）」と書かれており、昔から五十音順には「暗黙の仮置き換え」も含まれてきたのだから、それに従うべきだ。

これを考える一つの手がかりとして、日能研のウェブサイトにある「解説」には、

辞書の特徴を設定した時点で、これまでの受験生が持っている辞書の言葉の配列に関する知識はいったんクリアされます。

というくだりがある。これから推定すると、「仮置き換えはいったん忘れて考えよ」ということだろうか。

しかし、それに続く部分には、

新しく条件がその場で設定されるわけですから、それまで覚えていた辞書の言葉の配列に関する知識は使えません（注：ここでの条件とは、たとえば「五十音順に並ぶ」という

ような、辞書として重要な部分までの条件を変えてしまうものではありません。拗音・促音、あるいは長音の扱いなど、言わば「それぞれの辞書にある程度任されている部分」の条件です。)

という説明がある(文中の注も原文)。

そうなると問題は、「たとえば「五十音順に並ぶ」というような、辞書として重要な部分までの条件」の中に「暗黙の仮置き換え」も含まれるかどうかであるが、日能研はどう考えているのか、解説を読んでもそこまでは定かではない。

また、解説と共に掲載されている、出題者側である聖光学院国語科の内田先生の発言によると、これは決して「辞書の引き方を知っていますか?」という問題ではなくて、あくまでも、ここに書いてある条件が理解できますか、日本語として使えますか、という問題で、必ずしも辞書をよく引いている子が有利といったことはないと思います。

とのことである。

「必ずしも辞書をよく引いている子が有利とは限らない」ということは、「暗黙の了解を前提とはしない」という意味だろうか。だとすると、日能研の解答を正解と考えている、ということか。学校側としても、自分たちのインタビューがどのように掲載されたかは確認しているだろうから、そこに出ている解答は学校側の見解と一致していると考えるのが自然である。

しかし一方で、国語の先生であれば日常的に国語辞典を引いているだろうから、五十音順といたらこういうふうに並べるのだ、ということが当たり前過ぎて、「暗黙の了解」という意識すらなかったかもしれない。つまり、「ここに挙げられたルールだけを厳密に適用して(つまり暗黙の了解を使わずに)排列すると日能研のような答えになる」という発想自体が、最初からなかったかもしれない。

「出題校インタビュー」の中には次のようなくだりがある。

——こういう並びの辞書が現実にあるんですか。

内田先生——モデルはありますが、そのままではなく、少しだけ変えたものです。

これまで数多くの国語辞典を実際に見た結果、本文の凡例と最も近いものが掲載されていた金田一京助編『例解学習国語辞典』小学館がモデルではないかと思われるが、同書の「この辞典の使い方」(入試の辞典の最新版は第7版だが、第8版も凡例は同じ)では次のように書かれている。

二 見出し語のならばかた

(1) 見出し語は、あいうえお順(五十音順)にならべてあります。一字めが同じ場合は二文字め、二文字めも同じ場合は三文字めというふうになり、全部五十音順になっています。

(2) 見出し語の読みが同じ場合は、ひらがな、かたかなの順です。また、あてはまる漢字が学習漢字のものや、画数の少ない方を前にしています。

(3) 濁音の「が・ざ・だ」などは、清音の「か・さ・た」よりもあとに、半濁音の「ば・び・ぶ」などは濁音の「ば・び・ぶ」よりあとにならんでいます。

ホール → ボール → ポール

(4) よう音の「や・ゆ・よ」や促音の「っ」は、ふつうの「や・ゆ・よ」「っ」のあとにならんでいます。

(5) 「コーヒー」「ショート」などの長音をふくむことばは、その上の母音をくり返した形におきかえ、「コオヒイ」「ショオト」と考えてならべてあります。

ここでも仮置き換えについては一言も書かれていないが、実際の排列は他の辞典と同様、仮置き換えを行っているのである。

そう考えると、声の教育社に傾きそうになるのだが、よく比べてみると、『例解学習』では一字めが同じ場合は二字め、二字めも同じ場合は三字めというふうに、全部五十音順になっています。(下線引用者)

と書かれているのに対して、本件入試問題では、

一字めが同じ発音の場合は二字めで、二字めも同じ場合は三字めで決めるというふうに、五十音順にならべる。(同)

となっており、「発音」という言葉が補われている。

あえて「発音」の語を補足したのは、清音・濁音・半濁音を同一視しないということを示そうとしたのかもしれない。しかし、多くの子どもは、仮置き換えについてきちんと意識的に学習するわけではなく、辞書をよく引く子は経験的に何となく身につけているという程度のものである。そう考えると、「必ずしも辞書をよく引いている子が有利といったことはない」という学校側の説明があったが、むしろ「辞書をよく引いている子」が暗黙の了解をありとして考えて、かえって不利になった可能性も考えられる。学校側が入試の採点でどのような扱いをしたのか、気になるところである。

ちなみに、2003年11月に発行された『シカクいアタマをマルくする。国語編2』にもこの問題が掲載されているが、同書の解答編を見たところ、全く何の解説もなく、ただ正答とする選択肢の記号が書かれているだけであった。

II 五十音図と日本語表記の歴史

II-1 五十音図の歴史

さて、このような食い違いが生じた根本的な原因として、そもそも五十音順とは何かという

定義づけが必ずしも人々の共通認識となっていない点が指摘できる。ここで「人々」とは、国語学研究者や試験問題作成者などだけに限定せず（むしろ国語学者の間ではおそらく認識はほぼ一致しているのではないか）、五十音順で排列された辞典や索引を使用する人々を漠然と指す。まず辞書を引く。『広辞苑』第6版では次のように説明されている（原文縦書き）。

ごじゅうおん-じゅん【五十音順】五十音図の仮名の順序。

ごじゅうおん-ず【五十音図】五十音を声音の種類に従って縦・横に連ねた図で、子音の同じものを同行、母音の同じものを同段としたもの。国語音に存する縦横相通の原理を悉曇（したん）の知識によって整理して成ったものか。また、悉曇より出たもの、漢字音の反切（はんせつ）のために作られたものなど、その発生については諸説がある。旧称、五音図。

ごじゅう-おん【五十音】日本語の47種の音節を5字10行にまとめたもの。ア行のイ・エがヤ行に、ウがワ行に重複して出るため、五十音となる。

ただ、五十音図そのものを掲げている辞書は意外に少ない。上記の説明でも一応は分かるが、『国語学大辞典』の説明を引こう（原文縦書き）。

五十音図 縦に五字ずつ横に十字ずつ、計五十字の仮名を収めた次のような表。縦の五字の組を行と言い、それぞれ最初の字をとってア行・カ行などと呼び、横の十字の組を段（列とも）と言い、それぞれア段・イ段などと呼ぶ。かつては、カタカナを用いたが、近年はひらがなを用いたものも多い。仮名の種類は、いろはの四十七字以外に出ず、イ・ウ・エの三種は、それぞれ二カ所に重出する。

ア	イ	ウ	エ	オ
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	キ	ウ	エ	ヲ

古く五音、江戸時代には五音五位之次第、五十聯音図などと呼ばれた。（以下略）

『広辞苑』では「日本語の音節」をまとめた表としているのに対し、『国語学大事典』では「仮

名文字を取めた表」としている。五十音（ㇿ）が作られていった平安～鎌倉時代においては、日本語に現れる音節を体系化して整理した表ということができるだろうが、その後漢字の音読みの導入によって「キャ」「クッ」「グエ」などの拗音や合拗音表記が作られたり、「ファ」「ティ」等のさまざまな外来音も導入・定着していったため、今日においては「日本語表記の基礎となる文字の表」と割り切る方が妥当であろう。

実際、小学校の教科書の巻末や教室の黒板の上方に掲示してある表には、上記の五十音だけでなく、濁音（が・ざ・だ・ば）半濁音（ば）拗音（きゃ・しゃ・ちゃ・にゃ・ぴゃ・みゃ・りゃ）濁拗音（ぎゃ・じゃ・ぢゃ・びゃ）半濁拗音（びゃ）の各行も書かれていることが多く⁷⁾、もはや「50」音と呼ぶにはあまりにも数が多すぎるためか、「ひらがなのひょう」などと称していることも多い。なお、五十音図の成立については、山田（1938）および馬淵（1993）に詳しい。

II-2 辞書類における五十音順配列の歴史

辞書（字書）を編纂する際に、収録する語数・字数が増えるにつれて、その排列順が問題となる。このうち、音順排列で最初に登場したのはイロハ順であった。我が国最古のイロハ順辞書は、平安時代末期（1144～1181間）に成立した、その名も『色葉字類抄』といわれている。ただし、イロハで排列されているのは第1音節のみで、あとはイならいで始まる語を、天象・地儀・植物・動物など21のジャンルに分けて排列している。

このように、音順排列に際して第1音節あるいは第2音節までしか見ずに、あとは他の分類原理を導入する例はイロハ順、五十音順を問わずこのあとも広く行われた。単語の最後まで徹底した音順排列を貫く方式は、『日葡辞書』（1603）をはじめとする「日本語→外国語」の二か国語辞典で初めてみられるが、日本語はローマ字表記である。カナ配列の完全音順辞書は、明治時代にならないとあらわれてこない。官撰の国語辞書『官版語彙』（1871-84）はその嚆矢といえる。

また、我が国最古の五十音順排列国語辞書は室町中期（1484）に成立した『温故知新書』である。ただしこれも第1音のみ五十音順で、その下位分類としては意義による分類を採用している。

本節は沖村ほか（2008）によるところが大きい。

II-3 濁音表記の歴史

さて、今日のように濁音がひらがなの右肩に点を2つ打って表記されるようになるまでには紆余曲折があった。

そもそも仮名文字が成立していない万葉時代には、濁音専用の漢字（例 駄→ダ）を当てることで濁音を表示していたが、平安時代になって仮名文字が成立すると、その文字体系は清濁

を区別していなかったため、濁音であることを明示したいときは、あらためて何らかの方法で濁音を表示する必要が生まれた。種々の方法が試みられた中で、1600年前後には仮名の右肩に濁点を打つ方式が定着した。ただ、その使用は必ずしも広くなく、漢文の訓点としてのカタカナや漢字カタカナ交じり文に限られていた。これが平仮名文にまで広く普及し、丁寧に付されるようになるのは江戸時代前期以降であり、それでもなお、しばらく濁点は任意の符号であった。

次に半濁点であるが、現代ではp音で始まる音節が半濁音となっている。しかし、もともと日本語ではp音自体がハ行子音であったと考えられている。それが/p/→/Φ/→/h/と変わる流れの中で、改めてp音が半濁音として位置づけられたといえる。文献上パ行音を右肩の○で表すようになったのは、江戸時代に入った1700年代だという。ただし半濁点も任意の符号であり、必ずつけるという決まりはなかった。(以上、主として沖森ほか(2011), pp. 100-104による)

このような濁点・半濁点の用法の歴史は、今日なおさまざまな場面で看取することができる。

たとえば能の謡曲で用いられる謡本^{うたいほん}では、漢字に濁点が打たれていることがある。これは濁音で発音せよという記号である。(例 「旅路」はタビチではなくタビヂと発音することを示す)

我が国の法令は、かつては漢文、あるいはそれが日本式にモディファイされた変体漢文の一種である候文であったが、明治期に入ってしばらくすると、文語体の日本文となり、表記も漢字カタカナ交じりになる。そのカタカナでは濁点是用いられなかった。

例えば、商法(明治32年法律第48号)の中から現在も有効な条文を見てみよう。(下線は引用者)

第五百四十四条 仲立人ハ其媒介シタル行為ニ付キ当事者ノ為メニ支払其他ノ給付ヲ受クルコトヲ得ス但別段ノ意思表示又ハ慣習アルトキハ此限ニ在ラス

第五百四十九条 仲立人カ当事者ノ一方ノ氏名又ハ商号ヲ其相手方ニ示サザリシトキハ之ニ対シテ自ラ履行ヲ為ス責ニ任ス

昭和に入ると法令文にも濁点を用いられるようになる。ただし、旧法を一部分改正する際には、改正されない部分はそのままの文字づかいが残るため、同一の法律の中でも濁点の有無が混在することがある。同じく商法から例を引く。

第七百六十条 船舶ノ全部ヲ以テ運送契約ノ目的ト為シタル場合ニ於テハ其契約ハ左ノ事由ニ因リテ終了ス

- 一 船舶ガ沈没シタルコト
- 二 船舶ガ修繕スルコト能ハザルニ至リタルコト
- 三 船舶ガ捕獲セラレタルコト
- 四 運送品カ不可抗力ニ因リテ滅失シタルコト

2 前項第一号乃至第三号ニ掲ケタル事由カ航海中ニ生シタルトキハ傭船者ハ運送ノ割合ニ応シ運送品ノ価格ヲ超エサル限度ニ於テ運送賃ヲ支払フコトヲ要ス

このうち濁点が入っている部分は、1975(昭和50)年に改正を受けた部分である。

天皇の詔書に至っては、1945（昭和20）年のいわゆる終戦の詔勅においても「堪へ難キヲ堪へ忍ヒ難キヲ忍ヒ」のように濁点是用いられていない。最初に濁点が登場する詔書は翌1946年元日のいわゆる人間宣言である（朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、単ナル神話ト伝説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ）。また、今日でも濁点を打たない伝統的な表記を守っている例として、百人一首の取り札を挙げることができる。

このように、濁点・半濁点は長らく「発音を示すために必要があれば付する符号」であったものが、その後「正書法の一部」として位置づけるようになったといえることができる。このような濁点・半濁点の性格は、欧米言語におけるアクセント・ウムラウト・セディーユ等のダイアクリティカルマークにも通じるものがある。

したがって、濁点・半濁点が「付けても付けなくても良い記号」であった以上、辞書の見出し語の排列に際してその有無を考慮しないこととしたのは、いわば自然のなりゆきであったといえるべきであろう。

さらには、日本語においては連濁（例：組（くみ）→二人組（ににんぐみ））がしばしば見られるため、濁音と清音を別個の文字としない方が、辞典上近接して排列されるため好都合とも考えられる。

II-4 五十音順の基本原則

以上のような歴史的事情を背景にして整理すると、五十音順排列が内包する基本的な原理を次のように考えることができる。

1. 日本語の音節を表現する基本的な文字を、子音・母音の発音に基づいて5×10のマトリックスに整列したものが本来の五十音図である。
2. 今日の日本語では本来の五十音図にあらわれない音韻、文字も使われているが、それらは五十音に含まれる文字を基礎として表現する。具体的には記号（濁点・半濁点）を加えたり、文字を小さく書いたり（拗音・促音）、2文字以上を組み合わせたり（拗音）する。新しい文字の導入は「ん」（撥音）のみとし、それ以外の文字（たとえば「ファ」「ティ」などを1字で表すような全く新しい文字）は導入しない。
3. 辞書の見出し語を排列する際も、この「本来の五十音」の順序に還元して排列する。そのためには、「本来の五十音に含まれない音（あるいは文字）」、具体的には濁音・半濁音・拗音・促音・撥音の扱いを別個に決める必要がある。

この「『本来の五十音』の順序に還元」という部分も、西欧言語の排列規則に通じる部分がある。すなわち、ABC...XYZというラテンアルファベットの26文字は諸言語で共通に用いられている。言語によってはアクセント・ウムラウトなどのダイアクリティカルマークや、ドイツ語のエ

スウェット、スペイン語のll, ch, フランス語のae, oeなどのリガチャー（合字）の扱い等の問題が生じるが、それはラテンアルファベットの機能を拡張するための措置と考え、排列に際しても、まずはラテンアルファベットの26文字に基づいた排列に還元した上で、それぞれの言語圏の習慣の中で細目を定めることになる。また詳細は省くが、朝鮮語のハングルの排列においても、基本的には当初制定された24の字母の順序に還元して並べられている。具体的には濃音を表す子音並書や、母音を2つ以上組み合わせさせた合成母音の扱いである。このうち濃音については、韓国の辞典類の場合（北朝鮮はまた事情が異なる）、以前は日本語の濁音と同様の発想で、平音と混ぜて排列していたが、最近の辞書では平音が終わった後に排列している。

さて、3で「別個に決める」とした部分であるが、厳密に「本来の五十音」に制限するとすると、撥音「ん」の扱いも問題になる。大槻文彦の『言海』（1889）では、「ん」は「む」と同一視して排列しているが、今日さすがにこれは違和感が大きいであろう。「ん」は五十音の末尾、11行目に位置する独立した文字という意識が一般的になっているだろうから、排列にあたっては、「ん」は「を」の次に位置する独立した文字として扱うのがよからう。

それ以外のものについては、本来の五十音の範囲で処理する。すなわち、濁点・半濁点がついた文字は、さしあたっては清音と同一視して排列する。拗音・促音の小文字も、さしあたっては大文字の直音と同一視して排列する。辞典の凡例でおなじみの「清音→濁音→半濁音」や「直音→拗音・促音」という規定は、還元した上で並べただけでは順序が決定しない際に初めて発動する、次の段階のルールなのである。

II-5 図書館の目録の場合

図書館の目録においても、カードや冊子体の時代は、目録記入をどう排列するかという排列規則は情報検索においてクリティカルなものであった。このため、現行の日本目録規則1987年版改訂3版でも、特に排列規則だけで1つの編をさいて規定している。

概略は次のようである。

1. 見出し（図書館用語でいうと標目）となる対象の言葉（たとえばタイトル、著者名など）をカタカナ書きにして、あいうえお順（五十音順）に並べる。

2. その際、まず以下のような置き換えを全て行ったうえで並べる。

*濁音・半濁音はいったん清音に置き換え、また拗音・促音などの小さい文字は大きい文字に置き換える。たとえば「ザツジ」（雑事）も「ザッシ」（雑誌）も「サッシ」（冊子）も「サツシ」となる。

*外来語などに用いられる小さい文字は直音に置き換える。たとえば「ファン」は「ファン」。

*のばす音（長音）は、無視して並べる。たとえば「コーヒー」は「コヒ」。

3. 置き換えをした結果、一字めが同じ発音の場合は二字めで、二字めも同じ場合は三字め

で決めるというふうには、五十音順にならべる。

4. 以上の並べ方を行なったうえで、同順位の語があっても、置き換えを解除して(元に戻して)比較することはしない。その場合は、以下の各ルールを適用する。

5. 見出しとなる対象の言葉を比較し、カタカナ→ひらがな→漢字→ローマ字の順に並べる。

6. (その先は、対象となった言葉がタイトルか、著者名か……などによって異なる。ここでは省略する。)

なお、公共図書館のOPAC(利用者用検索端末)の中には、排列のみならず検索に際しても濁音・半濁音を同一視するものがある(たとえば「カギ」で検索すると「カキ」「ガキ」等もヒットする)。渡邊隆弘が2010年にWeb OPACを対象に行った調査では、都道府県立、大阪府・兵庫県内の公立図書館のいずれも、半数前後の図書館で濁音・半濁音を清音と同一視していたという(渡邊, 2010)。NCRに忠実なシステム設計といえるのかもしれないが、多くの利用者にとってはどうであろうか。確かに、「谷川(タニカワ/タニガワ)」のような場合は清濁まとめてヒットするという効果があるかもしれないが、WebOPACはもとより館内OPACにおいても漢字検索が可能になりつつある今日では、あまりこのメリットは効いてこない。むしろ検索結果の精度を悪化させる(ノイズを増やす)と感じられるケースも多いのではなかろうか。

また、百科事典類では、基本的に国語辞典と同じルール、ただし長音の扱っだけ図書館方式(つまり無視する)というものが多い。これには、外来語等の表記の揺れを吸収するというメリットがある。

III アンケート調査

III-1 林大の調査

さて、五十音に際しては「濁音・半濁音は清音に仮置き換え」等の排列規則が歴史的にも、また日本語の特性的にも、合理性を持っていることをみてきたが、今日の利用者から見て、仮置き換えを行う排列と行わない排列と、どちらの方法が自然であろうか。

^{はやしおおき}林大は1965年に、国立国語研究所員や国語学者、国語教育関係者、編集出版関係者など「技術畑、実務畑というよりも国語畑」の人々106人を対象にアンケート調査を行い、86名から回答を得た(林, 1965)。その中に、次のような項目がある。

機械(電子計算機など)に単語の分類をさせることにしますと、普通の国語辞書式とはだいぶ違った五十音順排列になるはず(これは、われわれ人間は、たとえば清濁を最初は区別しないで分類しますが、機械は最初から清濁を区別しますから)。たとえば、次のようになります。【表参照】

機械的な分類では、特別の手順を加えない限り、しかたがありません。このような機械式的分類排列は、許せるものでしょうか。

- a この機械式のほうがよい。17
- b 機械にさせる以上しかたがない。人間がそれに慣れるようにする。10
- c 機械式でもよい。必要などときには手順を加えて普通の順に直せばよい。40
- d 機械的な手順は複雑でも、常に普通の順に直して使うべきだ。11
- e 何ともいえない。7

このように、意外にも（消極的ながら）機械的順序（つまり仮置き換えだとかその解除だとかはいっさい行わず、濁音や半濁音は清音と別の文字として、また拗音・促音は直音とは別の文字として配列すること）に対して、許容的な姿勢が見られた。

ただし、設問文にもあるように、当時の機械処理の性能上、仮置き換え等の措置は困難だったことを考慮する必要があるだろう。今日とは比べものにならないほど、電子計算機の性能は低く容量は小さく価格は高く、しかも実際に触れられる人はまだまだ少なかった時代である。これで情報処理を行う場合、この仮置き換えをプログラムに組み込むと長くなり、メモリを余分に消費し、処理時間も長くなり、その影響は無視できないものがあつたのであろう。実際、電気通信大学の大山哲雄がアセンブラ言語 FASP でプログラムを書いたところ、単純ソートなら 106 語で済んだものが、2 倍を超える 240 語に達したという（大山、1972）。まして、電子計算機を用いずアナログな機械処理でソートしようとしたら（穿孔カードなど）、一時排列として仮置き換えを行い、それで同一順位なら解除して……などという処理に対応するのは非常に困難であろう。したがって、そのような限界の中で処理効率を上げようとしたら致し方がない、という意識が強く、「機械式のほうがよい」という積極的賛成の回答が少ないのもその気持ちの表れであろう。

コンピュータ資源が大容量、高速度、低価格化した今日においては、このような処理を組み込むことにはもはや何の問題もない。たとえばマイクロソフト社のデータベースソフト Access やスプレッドシートソフト Excel では Access97/Excel97 以降、カナのデータを整列すると、仮置き換えありの順序で並べられるようになっており、特段プログラムを組む必要さえない⁸⁾。したがって、もはや仮置き換えをしない機械的の排列でなければならない場面はほとんどないといえよう。

三省堂式	機械式
ふつう	ふっかける
ふつか	ふつう
ぶっか	ふつか
ぶつが	ふで
ぶっかく	ふな
ふっかける	ふろう
ぶっかける	ぶっか
ぶつかる	ぶっかく
ぶつり	ぶっかける
ふで	ぶつかる
ふな	ぶつが
ぶなん	ぶなん
ぶり	ぶり
ふろう	ぶつり
ぶん	ぶん

III-2 第1回調査

今日の大学生は五十音順についてどう感じているのかを探るため、アンケートを行った。アンケートは2回に分けて実施した。対象者は司書課程の授業「資料組織概論」の履修者である。

第1回調査は2011年6月1日（水）実施。対象者は当日出席していた36名。回収率100%。質問紙の内容は以下の通り。

1 日ごろ新聞や雑誌などを読んでいて、読めない字があって困ったとき、どのような手段で調べますか。いくつでも選んで下さい。

- a. 冊子体の辞書 b. 電子辞書 c. インターネット上の辞書 d. 携帯電話内蔵の辞書
e. 携帯電話の漢字変換 f. ワープロ, パソコンの漢字変換 g. その他
h. 調べない i. 読めない字があって困ったことはない

2 日ごろ冊子体の辞書をどのくらい使いますか。例えば「月に1～2回」「ほぼ毎日」のように答えて下さい。

3 あなたが普段使っている国語辞典を思い出して下さい。(普段使っているのがなければ、何か適当に今まで使った国語辞典でよいです。どの辞典でも大差ありません)

あるページには次のように単語が排列されていました。さて、「ははうえ（母上）」はどの位置に入るでしょうか。記号①～⑤から選んで答えて下さい。

①→

はは（母）

②→

はば（幅）

③→

ばば（馬場）

④→

パパ

⑤→

結果の概要は次の通りであった。

第1問（複数回答）

a.	冊子体の辞書	10 (27.8%)
b.	電子辞書	30 (83.3%)
c.	インターネット上の辞書	13 (36.1%)
d.	携帯電話内蔵の辞書	17 (47.2%)
e.	携帯電話の漢字変換	23 (63.9%)
f.	ワープロ、パソコンの漢字変換	12 (33.3%)
g.	その他	5 (13.9%)
h.	調べない	6 (16.7%)
i.	読めない字があって困ったことはない	0 (0.0%)

この設問は、平成21年度「国語に関する世論調査」に合わせた（選択肢は若干追加した）。全国の16歳以上の男女を対象とした同調査（調査対象数6730人、有効回収数（率）4108人（61.0%））では、次のような結果になっている。（年齢別の数値は20代のみ示した）

	全体	20代
本の形になっている辞書	29.6%	12.1%
携帯電話の漢字変換	25.7%	48.6%
電子辞書	12.2%	17.1%
インターネット上の辞書	11.1%	23.6%
ワープロ、パソコンの漢字変換	7.0%	
その他	5.3%	
調べない	34.2%	25.7%
分からない	0.7%	

一見して分かるのは、本学の学生の辞書使用率の高さである。なかでも電子辞書は83.3%もの高率を示し、冊子体も20代の平均の2倍を上回って健闘している。インターネット上の辞書、携帯電話の漢字変換等も全国の全体平均や20代平均を上回る。対象者が大学生であるため、自宅での学習や授業への持参など、日常的に辞書を必要とする状況が多いことを考えれば自然な結果といえる。加えて、司書課程履修者のほうが辞書をまめに引くという傾向があるのかもしれないが、これは非履修者の学生の数値がないので何とも言えない。

第2問は自由記述だったが、次のようにカテゴライズして集計した。

a ほとんど、年2回未満	22	61.1%
b 年2回以上月1回未満	4	11.1%
c 月1回以上週1回未満	7	19.4%
d 週1回以上	2	5.6%
計	36	100.0%

第1問の結果とあわせると、まず手が伸びるのは電子媒体の辞書であり、紙の辞書は使わない人が多数であるが、一方で少数ながら日常的に使っている人もいることが分かる。

第3問は、「紙の辞書を引き慣れている人ほど、濁音・半濁音は清音という仮置き換えになじんでいるであろう」という仮説のもとに作った設問である。

機械的に排列すると、「ははくははうえくはば」で②を選び、仮置き換えを考慮すると第1段階で「はは=はば=ばば=パパくははうえ」となるので⑤を選ぶはずである。

第2問の回答とクロスさせた結果は次の通り。

第2問×第3問	②	③	⑤	計
a ほとんど、年2回未満	18	0	5	22
b 年2回以上月1回未満	1	0	3	4
c 月1回以上週1回未満	5	0	2	7
d 週1回以上	1	1	0	2
計	25	1	10	36

回答数が少ないので判断が難しいところであるが、予想に反して、紙の辞書を使っているも②と答える人が多い一方で、あまり使っていないくても⑤という紙の辞書では一般的な排列を正しく答えている人もいる。

一方、第1問の結果を、a(冊子体の辞書)に○を付けたか否かで2分し、これと第3問の結果とをクロスさせると次のようになった。

第1問×第3問	②	③	⑤	計
aに○	7	0	5	12
aなし	19	1	4	24
計	25	1	9	36

これでみると、「どの辞書を使うか」と聞かれて紙の辞書を挙げる(aに○)人ほど、伝統的排列(⑤)を思い出す傾向が若干高いといえそうにもみえる。しかし、(サンプル数が少ないので本来は好ましくないが)参考程度ということで試みに χ^2 検定を行うと $\chi^2 = 0.2187$ と

なり、有意な差とはいえそうにない。

実際問題、ほとんどの学生にとって（学生に限らないが）多くの語を五十音順に従って意識的にソートする場面はそうあるものではない。たいていの場合、五十音順のルールは、「すでにソートされたものを利用するために探す」という場面で必要性が現れてくる。そこでは、ルールの理解が曖昧であっても、思いついたところになれば別の箇所を探すという試行錯誤によってさほど困難なく目当ての語を見いだすことができる。しかも、特に紙媒体の場合は1ページに収められている語数が電子媒体の場面よりはるかに多い上に、ページをばらばらめくるといった動作も可能である。すなわちブラウジングしやすい媒体である。したがって、五十音順の詳しい規則の理解は、辞書の使用にあたって必ずしも厳しく要求されるわけではない。このことを考慮すると、日頃から引き慣れていても、この問題のようにあらためて規則を突き出されると曖昧になってしまう人もおり、その一方で、あまり引き慣れていなくても何となく規則を会得してしまっている人もいると考えられる。このことは、次の第2回アンケートについてもいえる。

III-3 第2回調査

第2回調査は第1回の2週間後、6月15日（水）に実施した。対象者は38名。回収率100%。

質問は2問からなり、第1問は本論の冒頭に掲げた聖光学院中2002年度入試の国語第2問と全く同一である。

第2問は、次の通り。

この辞典のあるページには次のように言葉が並んでいました。ここに「ははうえ(母上)」を追加するとしたら次の①～⑤のどこに入りますか。(①～⑤は第①回調査と同じ)

以下では、この調査のうち、小問2, 3, 5はどちらの考え方も答えは同じなので省くこととし、五十音順に「暗黙の了解」すなわち「仮置き換え+必要ならその解除」が含まれるか否かによって排列順序が異なってくる問い、すなわち第1問の小問1と小問4および第2問のみを考察対象とする。また、「仮置き換え+必要ならばその解除」をルールとして含む場合を「伝統的排列」と呼び、記号xで示し、それを含まない場合を「機械的排列」と呼び、記号yで示すこととする。それぞれの考え方に従った場合に、導き出されるはずの解答は次のようになる。

仮置き換え	小問1	小問4	第2問
x：あり（伝統的排列）	ウ→ア→イ	ウ→イ→ア	⑤
y：なし（機械的排列）	ア→ウ→イ	ア→イ→ウ	②

第1問の集計結果は次のようになった。

小問1	小問4	人数	
x	x	10	26.3%
x	y	2	5.3%
y	x	2	5.3%
y	y	21	55.3%
z:その他		3	7.9%
合計		38	100%

小問1と小問4とで論理が一貫していない人 (xy, yx) も中には若干いるが、ほとんどは一貫して考えていること、また一貫している人の内では、問題文を読んで「伝統的な仮置き換えは行わない」と考えた人 (yy) が、「仮置き換えも行う」と考えた人 (xx) の2倍いることが分かる。

第2問の集計結果は次のようになった。

第2問	人数	
x:⑤	10	26.3%
y:②	24	63.2%
z:その他	4	10.5%
計	38	100.0%

yがxの2倍という点では第1問の結果 (yyがxxの2倍) と符合する。ところが、詳しく見てみるともう少し複雑である。

小問1, 小問4, 第2問の回答が、それぞれ伝統式 (x) 機械式 (y) その他 (z) のいずれであるかを順に並べて表すと、次のような結果になった。

xxx	5	13.2%
xyy	5	13.2%
xyx	2	5.3%
yyx	2	5.3%
yyx	3	7.9%
yyy	15	39.5%
yyz	3	7.9%
zyy	1	2.6%
zyz	1	2.6%
zyy	1	2.6%
計	38	100.0%

すなわち、第2問の冒頭で「この辞書の」と、第1問と同じ条件を適用することを明示しているにもかかわらず、第1問と第2問とで考え方が変わっている人 (xyy, yyx) が全体の2割ほどおり、一貫したルールによる排列作業が意外に難しい人が多いことをうかがわせる。もっとも、問題自体が第1回調査と同じであることから、そのときにどう解答したかを思い出して答えた人もいるかもしれない。

以上のことより、「仮置き換え」を明示せずに「五十音順」とのみ書かれていた場合、自然に仮置き換えを含めて考える人とそうでない人がいること、またそれはある程度紙の辞書に親しんでいるかどうかによって若干の違いが見られるが、有意といえるほどではないことが分かった。

III-4 機械式排列に対する違和感

林大の調査（1965年）での設問文のワーディングには、「しかたがありません」「許せるものでしょうか」など、機械式排列に対する調査者の否定的な心情が強くにじみ出ている。それにも関わらず106人中の17人が「この機械式のほうがよい」と肯定的な回答をしている。これをどう評価するかは微妙であるが、ただ一つ注意すべき点は、この質問は電子計算機による排列作業が前提になっているものであって、排列のあるべき姿に関する一般論ではないということである（したがって、「機械式排列しかできないのであれば、電子計算機を用いず手作業で行うべきだ」といった選択肢はない）。この点を考慮すれば、「排列の一般論として機械式排列がよい」という積極的賛成派はやはり少ないとみるべきであろう。

一方、今回の第1回・第2回調査は、コンピュータという語も用いず、また伝統的排列の方がプログラムが複雑になるということも書いていない。純粹に、排列規則を示して実際に排列作業をしてもらっただけである。第3回調査として、両者の排列を比較してどちらが自然と感

じられるかを尋ねればよかったが、残念ながら今回は行っていない。

ただ、機械的排列に対する違和感・抵抗感は、半世紀前に比べると減ってきているのかもしれない。そのことを示唆する一つの事例がある。

質問回答サイト「教えて! Goo」に2001年2月28日に投稿された質問に次のようなものがあった。(osio, 2001)

新入学児童の名簿を男女混合五十音順に作成しました。名字が「あがつま」と「あかま」では、後者が先のように思いますが、エクセルやアクセスでは、ソートすると、前者が先になります。正しい五十音順とは? (または、一般的な…。)

このosioさんと称する小学校教員らしき質問者は、コメント欄で

きょう、職場でパソコンの研修会があって、講師の方に質問してみたら、「あかま」「あがつま」の順でしょう。> と言って、エクセルでソートしてみたら、その逆になって、講師の方も、???だったのです。

五十音順については、ず〜っと単純比較方式で頭にインプットされておりました。辞書類も、ずっとそうだと思い込んでいました。それなのに、違和感なく使っていた私は…。

児童名簿は、ソートの結果通りにします。でも、個人的には、単純比較方式が好きです。

と述べている。

この質問者も、またパソコンの講師の人も、五十音順といえば単純比較方式(本稿の機械式排列)と考えていたこと、特に質問者の方はむしろ機械式排列に対して積極的に肯定していること、またそれにも関わらず伝統的排列の辞書類を違和感なく使い続けていたことが分かって、大変興味深い。「五十音順の詳しい規則の理解は、辞書使用にあたって必ずしも厳しく要求されるわけではない」のである。

IV 児童が接する教材等における扱い

IV-1 教科書

辞典に関する学習は、現行の2つ前の学習指導要領(1989年告示, 1992年施行)では小学4年で学習することとされていた(国語の第4学年の内容として「表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解すること。」とある)。実際

の教科書では、4年の上巻で国語辞典を、また4年の下巻で漢字辞典を扱うのが通例だった。

その次の指導要領（1999年告示，2002年施行，いわゆる3割減）では，学習内容が2学年ごとにまとめられ，辞書については「第3学年及び第4学年」で学習することとなっているが，実際の教科書では国語辞典が3年の上巻で，また漢字辞典は4年の上巻で扱われるようになった。

現行の指導要領（2008年3月28日告示，2011年4月1日施行）でも，辞書については「第3学年及び第4学年」となっている（ただし，内容が「表現したり理解したりするために必要な文字や語句について，辞書を利用して調べる方法を理解し，調べる習慣を付けること」と変わり，従来は中学年で「辞書を利用して調べる方法を理解」した上で高学年で「辞書を利用して調べる習慣を付ける」となっていたのが，まとめて中学年で扱うようになった）。また，学習指導要領解説国語編にも，3年か4年かといった記述は見られないが，実際には3年で国語辞典，4年で漢字辞典の使い方を学習している。ただ，この解説を見ても，「国語辞典や漢字辞典などの使い方を理解するとともに，必要なときはいつでも辞書が手元にあり使えるような言語環境を作っておくことが重要である」等と述べられてはいるが，具体的な排列規則の説明への言及はない。

さて，実際の小学校国語教科書及びその指導書では，国語辞典の排列はどのように扱われているだろうか。過去十数年分の各社（学校図書，教育出版，東京書籍，光村図書＝以上五十音順）発行の小学校国語3年・4年の教科書を調査した結果，次のようなことが分かった。

1. どの出版社，どの時期でも共通して，「国語辞典の使い方」といった小単元が設けてあり，おおむね2ないし4ページを割いて，実際に辞典を引きながら，排列規則を習得するようになっている。
2. 学習する規則として，「五十音順に並べてあること」「1字目が同じなら2字目，それも同じなら3字目…」「清音の後に濁音，そのあとに半濁音」「言い切りの形（終止形）で出ている」などを学ぶ。（以前は，もっと簡単にすましていた教科書中にもあったが，現行のものでは各社とも，ここにあげた規則は必ず含まれている。）
3. 仮置き換えと解除について触れてあるものはない。学習指導書でも触れていない。
4. 実際の辞典の紙面からの抜粋（あるいはそれをまねして組み直したもの）が掲載されていることが多い。

ここで問題となるのは，やはり「清音→濁音→半濁音」などのルールがどこで使われるかである。既に述べているように，実際の辞典では，仮置き換えを解除する必要が生じたときに初めて適用されるのであるが，教科書の説明ではそれに触れていないため，「清音・濁音・半濁音は別の文字と見なして排列する」（前節で述べた「機械的排列」と考える児童も出てくるかもしれない。

多くの教科書では、どちらの解釈でも結果的に同じ順序となるような事例を挙げているが(したがって本稿の第2回調査で行った「『ははうえ』はどこに入るか」といった事例はない)、掲載されている辞典紙面からの抜粋の中には、この問題が絡んでくるものも散見される。

たとえば、光村図書の現行教科書『国語3上 わかば』では、本文では「ホール→ボール→ポール」という無難な事例であるが、辞典紙面では「ひろいもの→ピロード→ひろがる」という排列が見えており、この並び順を説明しようとしたら、仮置き換えに触れる必要が生じる。だが、学習指導書を見てもその説明はない。(なお、同社の旧版では無難な例のみが挙がっている。2011年版であえてこれに変えたのかもしれない。)

学校図書も無難な事例で来たが、2011年版では辞典紙面見本が2つに増え、いささか字が小さいので気づきにくいのだが、よく見ると「つりがね→つりかわ」の例が見え、「清音→濁音」のルールがここでは適用されていないことが分かる。

逆に教育出版は、2001年版に掲載されている辞典の紙面見本では「フライパン→ブラウス→ふりあげる」と清濁混在の例が見えていたが、2005年の改訂で無難なものに変わり、今日に至る。

東京書籍では、紙面見本が大きめに掲載されていることもあって、調査した範囲の1990年版から最新の2011年版まで、載っている言葉は変わっても、つねに清音・濁音が混在している。一方、本文では当初、「清音→濁音→半濁音」の規則自体説明がなかったが、1996年の改訂で登場し、2011年の改訂で「多くのじてんでは」の限定語が付いた。

このように、無難な事例に限定するか、清濁混在を載せるかについては、教育出版以外は、多くの出版社が清濁混在も紙面見本という形で載せる方向にあるように見える。どっちみち実際に辞典を引けばすぐに会うことであるから、あえて隠す必要はないと考えているのだろうか。ただし、そこまで意識して選んでいるかどうかは定かではなく、たまたまかもしれない。

ところで、光村(2011年版)は「清音→濁音→半濁音」の規則について本文で述べる際に、「多くの辞典では」という前置きを付けている。指導書でも「辞書によっては、違っているものもある」とわざわざ記している。

教育出版(同)はさらに丁寧に、本文で「このような言葉のならば方のきまりは、その辞典で使われている記号などは、辞典によってことなることがあります。これらは辞典の『使い方』のページに出ているので、それぞれの辞典でたしかめてみましょう。」と記し、指導書では「※自分の辞典を絶対と思わぬよう指導する」とわざわざ注意書きがある。

辞典を初めとするレファレンスツールの使い方に関する一般論としては全く正しい。いきなり本文を開けるのではなく、まず凡例をしっかり読むべきだからだ。特に相手が小学生の場合は、習うより慣れろという面もあるが、ある程度慣れたら、やはり凡例に戻って編集方針や収録内容等をきちんと把握すべきである。

だが、「清音→濁音→半濁音」の規則を適用していない辞典は非常に稀である(少なくとも現在出版されている辞典では、筆者は出会ったことがない。図書館の目録カードは、NCRに

正しく従っていれば、その稀な事例となるが、辞典とはいえない)。小学生がそのような辞典に出会う可能性は限りなく0に近いといってもよい。一方、仮置き換えの規則は、現在出版されている辞典ではほぼ全て(少なくとも筆者が見た範囲では全て)で採用されている。つまり実際に出会う事例の多寡と、教科書に書かれている説明の有無が逆なのだ。

もちろん、排列は法律ではないので、あえて「清音→濁音→半濁音」を採用しない辞典があってもおかしくはないし、その意味で「多くの辞典では」の前置きも悪いとは言わない。また、初めて辞書の排列について学ぶ3年生には、仮置き換えの話は高度だからよけて通ろうというのも教育的配慮として意味のあることではあろう。しかし、「なぜこの順序なの?」という質問が出たときに、仮置き換えのルールさえ分かれば解決するにもかかわらず、「辞典によっては違うんだよ」とお茶を濁してしまう場面も生まれまいかと危惧される。せめて指導書ではしっかりと説明すべきであろう。

IV-2 参考書・問題集・試験等

小学生、特に3年生を対象にした学習参考書や問題集では、国語辞典の使い方の単元を設けているものが多くある。また深谷圭助氏が立命館小学校の校長時代に提唱・実践した、子どもたちにどんどん辞書を引かせて付箋を付けさせる学習方法が有名になり、辞書の引きかたに特化したワークやドリルもいくつも出ている。そこでは、冒頭の問題に示したような「きまり」を1つずつ学習し、それに対応して「次の各単語を辞書に載っている順に並べなさい」という問題がいくつも並んでいるのが一般的である。しかし、たいていの場合、冒頭の問題の小問1や4のように「仮置き換え」を考えるか否かで順序が変わるような問題は巧妙に避けられている。

『深谷式名作辞書引きドリル』は、いわゆる名作を辞書を引きながら読み進めることが主眼のドリルであり、辞書の引き方自体についてはわずかに冒頭の2ページにまとめられているに過ぎないが、その中で『「ぶた→ぶたい」のように文字数が少ない方が先に出てくることも覚えておきましょう』(同書p.6)と、「無は有に先行する」のルールにきちんと触れている点は特筆すべきである。ただ、ここでも仮置き換えについての言及はない。

『自由自在国語』では、本文の「国語辞典の引き方」では他書と同様の説明しかないが、発展問題として灘中学校の入試問題が載っている。

次の国語辞典の凡例の一部を読んで、あとの問に答えなさい。

- (1) 見出しの配列(並べ方)は五十音順に従った。
- (2) 五十音順で順序のきまらないものは、次のように定めた。
 - (ア) 「ん」は「を」のあとにおく。
 - (イ) 清音・濁音・半濁音の順にする。(以下略)

問い 次のそれぞれの語群の中で「凡例」の並べ方に従って言葉の順番をいれかえ、その

順番を記号で答えなさい。

② ア 強盗 イ 行動 ウ 高等 エ 国道 オ 合同(①および③以降略)

だが、本書解答編には「ウイアオエ」と答えが載っているだけで、説明はない。

本問の出題者は、本来の五十音順の意味を正しく意識している可能性が高い。「五十音順で順序のきまらないもの」という言い方や、まず「ん」の扱いに触れている点などからそれがうかがえる。しかも、聖光学院と異なり、「一字めが同じ発音の場合」などという細工もしていない。したがって、出題者の意図としては伝統的な排列を求めているのであろうから、本書の解答も妥当とは言える。しかし、読者は機械的排列で考えて、「ウイエアオ」と答えるかもしれない。

かろうじて一言説明している貴重な例として、榊谷雄三『学力ドリル 国語 小学4年生』がある。「次の見出し語は、どちらが前に出ているでしょう。前に出てくる方に○をしましょう」という問題の第5問が、次のようになっているのだ。

① () ア ばんぐみ ② () ア がいとう ヒ・ン・ト
() イ はんけい () イ かいだん ※点々をとって

ただ、これにしても、どのようなときに点々を取って考えるのかといった詳しい説明は載っていない。

IV-3 まとめ

これまで多数の小学生向け、また小学校教員向けに書かれた、辞書の使い方を学ぶ/指導するための文献を見てきたが、伝統的な五十音順についてきちんと(すなわち、本来の五十音に還元するために仮置き換えを行い、濁音や拗音等のルールは、もしそれで順位が付かないときに初めて登場するのだということを含めて)説明している文献にはまだお目にかかっていない。出版点数が多いため網羅的に探索することは困難であるが、これまでの経験から、もしあったとしてもごく少数であることは間違いなからう。むしろ、マイクロソフト社の製品のマニュアルや、日本工業規格の規格票など、情報工学系の文献のほうに記述が見られる。

もちろん、初めて辞書の使い方を学ぶ児童に対して、厳密なルールをいきなり教えるのは教育的ではなく、むしろ実際に辞書を手にして引きながら、辞書の排列に親しむようにしていくべきであろう。各種の並び替えドリルも、本来ならその範囲内での学習活動の一環として展開されれば十分である。前述のように、実際に使う場面では「語を五十音順に並べる」のではなく「五十音順に並べた語を探す」ことができれば十分であるからだ。しかし、問題はその先であって、実際に引いたりドリルを解いたりしているうちに、ルールの適用の優先順位について疑問を持つ子が出てくるかもしれない。また、特に中学受験を考えている児童であれば、参考書や問題集などで仮置き換えが関わってくる問題に直面するかもしれない。そのようなときに

備えて、指導者は本来の五十音順の意義について理解しておく必要はあるだろう。また、参考書や問題集において、それらが関わる問題を載せるのであれば、何らかの説明も書くべきであろう。「辞書を見てみる、実際にそうなってるじゃないか」だけで逃げるのはよろしくない。

そして入試をはじめとする各種の試験問題としてこの手の整序問題を出題するのは、五十音順に仮置き換えが含まれるかどうかが教育現場で徹底しているとはいえない現状では、解釈の曖昧さが残り、適切とはいえない。どうしても出題するのであれば、その現状を踏まえ、凡例に言葉を補って曖昧さをなくす必要がある。

注

- 1) 本論の題名にも使われている「排列」だが、本稿では「一定のルールに基づいて正しく配列すること」を「排列」と表現する。これは図書館情報学における目録法の習慣に従ったものである（ただし図書館関係者でも排列の文字を使わない人もいる）。
- 2) もっとも、この1番の解答・解説を見ただけでは、声の教育社が1番の段階で大文字・小文字を同一視して3文字めに進んだと断言はできない。「④のきまりは、拗音や促音に関するものである。一方、ア/ァは拗音でも促音でもないので、きまり④は適用されない」と解釈した、という可能性もあるからだ。しかし、きまり④では「拗音の「ャ」「ュ」「ョ」や促音の「っ」などのような小さい文字で書くかな」（下線引用者）と書いてあるし、次の第4問の答え方を見れば、やはり声の教育社の解答作成者が「小文字を大文字で置き換えた上での排列」を考えていることは明らかだろう。
- 3) なお、もしこれらのルールを「条件を適用する優先順位の順」に並べるのであれば、この長音記号置き換え規定は、この位置ではなく、ルール①の2とルール②との間に置くべきである。なぜなら、②の段階で全ての語に対して順序を決める作業を行うので、その時点で長音の扱いが決まっていないと排列に困るからである。後述のJIS規格ではそのようになっている。
- 4) ただし、仮置き換えのルールを直接述べているわけではないが結果的にそれに近いものとして、学習研究社が発行している国語辞典を挙げることができる。『新レインボー小学国語辞典』改訂第3版（2005）では、巻頭の「この辞典の組み立てときまり」という凡例こそ他社と大同小異であるが、別冊の『国語辞典の使い方』という小冊子のp.5では、「かいきん→かいぐん→かいけつ」という例を見ながら、イラストで描かれた小学生風の男女が「『かいぐん』は『ぐ』になっているよ。」「『ぐ』は『く』と同じに考えればいいよ。」という対話をしており、また同じページでは「無は有に先行する」の説明もされている。ただし、その次のページでは、「にごる音は、にごらない音の後に」や半濁音の説明がされているが、これを読んで「あれ、同じに考えるんじゃないか」と早のみこみしてしまう人がいるかもしれない。せっかくここまで説明したのであるから、「同じに考えたのでは順番が決まらないときは」といったところまで触れてしまっても良いのではないか。

また、同社の『現代標準国語辞典』改訂第2版（2011）では、「この辞典の使い方」中の「ことばのならば方」の項に、次のような記述がある。（下線部は引用者。また、実際には排列の例が示してあるが、ここでは省略した）

①見出し語は五十音順でなっています。

②五十音で順序が決まらないものは、次のようになっています。

(1) 清音→濁音→半濁音の順。

(2) 小さく書く「っ」（促音）や、「ャ」「ュ」「ョ」（拗音）は、それぞれふつうの「つ」「や」「ゆ」「よ」のあとに並んでいます。

(3) 外来語を書き表すときの小さな「ア・イ・ウ・エ・オ」は、それぞれふつうの仮名のあとになっています。

(4) 片仮名の長音「ー」は、その発音にしたがって、「ア・イ・ウ・エ・オ」におきかえてならんでいます。

このように、拗音・促音等は五十音順の枠外にあることが明記されている。辞典の凡例でこまで記されていることは珍しく、注目に値する。

- 5) $A < B$ は「AはBより前の順序」の意味。
- 6) ϕ はゼロ文字、つまり文字列が存在しないことを示す。なおこの規則を一般に「無は有に先行する」という。
- 7) 本来は「あ行」などの呼び方は五十音のア行～ワ行に対するものであるが、便宜上「行」と呼ぶ。
- 8) Accessのヘルプファイルの説明は、伝統的五十音順排列の説明として、簡にして要を得たものといえる。以下に引用する。

Accessでのデータの並べ替え並べ替え順序の規則について説明します。次の先頭の数字は、並べ替えの優先順位を示しています。ここでは昇順の並べ替えに限定して説明します。

濁音・半濁音・促音・拗音は次のように清音とみなして排列します。また長音符は、すぐ上の片仮名の母音を繰り返したものとして排列します。

濁音	: ばら→はら
半濁音	: ばん→はん
促音	: らっかせい→らつかせい
拗音	: りゅう→りゆう
長音符	: こーひー→こおひい

同じ音の場合、濁音・半濁音は清音の後に置かれます。排列の優先順位は文頭から文末に向けて低くなります。

しけん
↓
しげん
↓
じけん

促音・拗音は清音の前に置かれます [引用者注 辞典では逆のものも多い]。排列の優先順位は文頭から文末に向けて低くなります。

はっか
↓
はつか

参考文献

- Access 95, およびAccess 2000での五十音順の並べ替え規則について. <http://support.microsoft.com/kb/417139/ja> 文書更新日2006年3月28日【最終アクセス2012/01/15】
- Excel 2003での五十音順の並べ替え規則について. <http://support.microsoft.com/kb/410807/ja> 文書更新日2006年3月28日【最終アクセス2012/01/15】
- 大槻文彦『言海』（ちくま学芸文庫 N-3-1）筑摩書房, 2004
- 大山哲雄「五十音順排列手順の分析」電気通信大学学報, 第23巻第2号, 1972, 233-236 osio[ハンドル名]『正しい五十音順について』教えて!Goo, <http://oshiete.goo.ne.jp/qa/46108.html>, 2001/02/28 22:32 投稿【最終アクセス2012/01/15】
- 沖森宅也・笹原宏之・常盤智子・山本真吾『図解日本の文字』三省堂, 2011
- 金田一京助『例解学習国語辞典』第7版 小学館, 1999
- 金田一京助『例解学習国語辞典』第8版 小学館, 2004

- [声の教育社編集部]『聖光学院中学校 最近5年間入試の徹底研究 19年度受験用』(中学校別入試問題シリーズ, O-11-★) 東京学参, 2006
- [声の教育社編集部]『聖光学院中学校 6年間入試と研究 16年度中学受験用』([中学校別過去問題集], 303) 声の教育社, 2003
- 国語学会『国語学大事典』東京堂出版, 1980
- 日能研『シカクイアタマをマルくする。』(幻冬舎文庫) 幻冬舎, 2003
- [日能研]「シカクイアタマをマルくする」新シリーズ2002年9月版 国語 http://www.nichinoken.co.jp/column/shikakumaru/archive/mondai/sm_k_0209.html 【最終アクセス2012/01/15】
- 『日本語文字列照合順番』(日本工業規格JIS X 4061-1996) 日本規格協会, 1997
- 林大「五十音順排列についての意見」言語生活, 昭和40年7月号, 筑摩書房, 1965, 70-77
- 深谷圭助『深谷式名作辞書引きドリル』改訂版(脳育チャレンジ) 幻冬舎エデュケーション, 2011
- 榊谷雄三『学力ドリル 国語 小学4年生』増補版, 清風堂書店, 2009
- 馬淵和夫『五十音図の話』大修館書店, 1993
- 文部科学省『小学校校学習指導要領解説 国語編』文部科学省, 2008
- 山田孝雄『五十音図の歴史』宝文館, 1938
- 渡邊隆弘『公共図書館WebOPACの現在』日本図書館情報学会情報組織化研究グループ月例研究会報告, 2010.1.30(当日発表レジュメは<http://www.tezuka-gu.ac.jp/public/seiken/meeting/2010/watanabe201001.pdf> 【最終アクセス2012/01/15】)
- 各社国語教科書及び指導書(小学3年・4年)

The Hidden Rules in the Goju-on Collation Order of Japanese Character String

Iwao MATSUYAMA

Abstract

The Goju-on collation order is the most widely used in sorting Japanese strings -- such as the word order in dictionaries and indexes. It is based on the order of 50 basic syllabaries in Japanese. However, details about the collation is not uniquely defined and some kind of variety on the rules exists. This article discusses the hidden rules in the widely accepted and traditional version of Goju-on rules.

keywords : Goju-on order, dakuon (voiced) mark, han-dakuon (semi-voiced) mark, collation order, orthography, Japanese dictionary, entrance examination